

暗唱聖句 「なぜなら、罪は、もはやあなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるからです」

ローマ6：14

今週の聖句 ローマ6章、ヨハネ第一1：8～2：1

今週の研究：聖書では、「聖なる者となる」は、神に「献身する」を意味します。この意味で、聖なる者とされた人々とは、神に献身した人々のことです。しかし、「聖なる者となる」というこの聖書の用法は、決して重要な聖化の教えや、聖化が一生の業であることを否定するものではありません。聖書はこの教えを強く支持し

ていますが、一般的には、別に言葉を用いてそれを描写しています。

今週は、誤解しやすい信仰による救いのもう一つの側面、イエスによって救われたものの生活と罪への勝利の約束について学びます。

月曜日：パウロは、「罪に支配されて・・・はなりません」と言っています。これは、義とされた人が、罪が彼の人生の王として君臨するのを阻止することができることを暗示しています。自分の意志の力を働かせるのは、ここにおいてです。

私たちが自分の力でそれと闘うとき、悪い願望は強いものまた抵抗できないものとなります。罪は冷酷な暴君のようなもので、決して満足しないだけでなく、つねにより多くのものを求めてきます。ただ信仰によって勝利の約束にすぎることによってのみ、私たちはこの無慈悲な主人に打ち勝つことができます。&lt;/DIV>

バプテスマを受けた人は、「神に向いて」生きています。神は彼の生活の中心です。彼は神に仕え、神のお喜びになることをしているので、同時に罪に仕えることはできません。彼は「キリスト・イエスに結ばれて神に向いて生きている」のです。

水曜日：人は自分の主人を選べるとパウロは言います。人は罪に仕えて死に至るか、義に仕えて永遠の命に至るか、どちらかです。中立の立場、あるいは妥協の余地がありません。これをとるか、あれを取るかです。私たちは永遠の命か永遠の死のどちらかを選ぶことです。

木曜日：同時に、私たちはみな知っているように、罪の支配から解放されることは罪が無くなること、葛藤が無くなること、さらには墮落することすらなくなることを意味するものではありません。そうでは

なく、たとえ罪が現実として私たちのうちに残っていても、またたとえ毎日、罪に対する勝利を要求しなければならぬとし

ても、私たちがもはや罪に支配されるようなことがないという意味です。

-----  
ローマ信徒への手紙の中で、わたしが最も好きなのは5：20～6：2です。

5：20の前半に「律法がはいつて来たのは、違反が増し加わるためです。」とあります。パウロが何回も律法の役割は、罪をはっきりとさせて、わたしたちが罪深いことをじかくさせるためだと教えています。ここに気づかないと、わたしたちが救いを求めようとしないからです。自分たちが立っている場所が、どんなにか不安定で、不潔で、暗いところが気づかなければ、他へ移りたいとは思いません。

20節の後半には「しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。」とあります。現実には気づいたとしても、その泥沼から抜け出せないとしたら、この世界は地獄です。けれども、律法によって罪に気づかされたとしても、その律法を書いた神さまからの無償の恵み、罪のあがないがセットで与えられるのです。そしてそれはもっと大きなものなのです。

5：21では「こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。」と神さまの恵みの約束をパウロが示しています。

そして6：1で「では、どういうことになるのか。恵みが増すようにと、罪の中にとどまるべきだろうか。」それだったら、罪が赦されるのだったら、今までの快樂の中に留まっていたほうが、楽しく過ごせるのではないだろうか。

このような考えにパウロは厳しい口調で「決してそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるでしょう。」と述べています。

今週の学びである罪に打ち勝つためには、わたしたちが罪から離れたいと心の底から思うかどうかにかかっています。そうなれば、わたしたちの選びもかわります。そして心の中に神さまに住んでいただくことを選ぶことができます。

放蕩息子がどん底で、父の家に帰ろうとしたように、わたしたちも自らのほんとうに姿を悟らされた時に、心から神さまに助けを求めることができるかもしれませんね。